

エリア51《虫の瞳》は、「孤立を考えるためのパフォーマンス・アート」と銘打たれている。2019年に日本で起きた「ALS患者囑託殺人事件」と、フランツ・カフカの小説『変身』を参照項とするこの作品は、4名のパフォーマーが別々の展示空間で個別にパフォーマンスをする構成となっている。筆者が訪れた回では、中野志保、神保治暉、トム キラン、山本史織が在廊しパフォーマンスを行っていた。

その中で、「ALS患者囑託殺人事件」を真正面から扱っていたのは、ALS患者を演じるトム キランだった。パフォーマンスの中でトム キランは、車椅子に座り、口に咥えた木の棒で、アクリル製の文字盤を指し示すことで、観客とのコミュニケーションを行っていた。観客によって会話の内容は異なるようであったが、筆者が会話した際には、ALS患者の多くが気管支切開（症状が進行したALS患者にとっては延命措置にあたる）を希望せず亡くなるといった、日本におけるALS患者の状況について説明を受けた。トム キランと行った会話は、ALS患者の会話形式が、健常者である私が行っている会話形式と大きく異なっていること、それゆえ健常者の感覚を元にした会話形式がALS患者を阻害している面もあるであろうことを感じさせるものだった。

トム キランが、ALS患者の孤立というパブリックなテーマを扱っていたのに対して、中野、神保、山本のパフォーマンスは、よりプライベートなレベルでの孤立を扱っていた。中野のパフォーマンスは、真っ黒なシートが敷かれた床に、花札やカラーボールなどの玩具が散乱する、子ども部屋のような空間で行われていた。人間の脳を模したような玩具の入ったカプセルを手元で転がす様子は、パフォーマーが一人遊びの中へ耽溺していく印象を与える。神保のパフォーマンスでは、部屋の中にプラレールの運行路が組み立てられ、レーンを走る列車の上に設置されたスピーカーからは、『変身』の朗読が流れていた。神保本人は、観客に背を向けて窓際でラップトップに『変身』のテキストを打ち込み続けており、表情すら見えないその姿は、観客とパフォーマーの間に大きな溝があるかのように感じさせる。

しかし、中野・神保のパフォーマンスが、観客から完全に断絶されているかと言えば、そうではない。例えば中野が手に持つカプセルは、時折観客に向けて放り投げられる。「観客側に」ではない。個別の観客に向けて、放り投げられるのである。その点で、パフォーマーの側から、観客に向けた発信は明確に行われている（観客はそれを、意味を伴ったメッセージとして受け取ることにはできないけれども）。神保のパフォーマンスにおいても、パフォーマーから観客への発信は行われていた。入口の近くには小型のプリンターが設置されており、そこからは時折、神保が入力した『変身』のテキストが印刷される。印刷されたテキストは持ち帰ることができ、その様子は、さながらパフォーマーからの贈り物のようであった（しかしそれは、贈り物であると確信するのが難しい）。両者のパフォーマンスは、パフォーマーからのコミュニケーションの発信が垣間見えるからこそ、観客側での受信が失敗することによって、パフォーマーの孤立を強く印象づけている。

中野・神保のパフォーマンスが、発信と受信の失敗により孤立を前景化させていたとすれば、山本のパフォーマンスは、コミュニケーションのゼロ地点を示すことで、孤立を干上らせるようなものであった。山本はパフォーマンスにおいて、コンロ、シンク、冷蔵庫やベッドなどが置かれた生活感を感じさせる空間の中で、食事の用意をしたり、横になって本を読んだりしている。そこには確かに肉体を持った人間がいる。しかし、ほとんど音を発することなく、室内で淡々と動作を進めるパフォーマーの存在感は、音楽を流すラジオや、左右に首を振る扇風機などの無生物に限りなく近い。山本のパフォーマンスを観ていると、孤立することも人間としての存在感が薄れるまで突き詰めれば、いっそ孤立という感覚が生じることすらなくなってしまうのではないかと、そのように思わされた。

このように、4名のパフォーマーはそれぞれ異なる手法とレベルにおいて、孤立というテーマを扱っている。しかし、孤立を広く現代の社会における構造的な問題として捉えれば、《虫の瞳》という作品全体が、社会問題を扱ったものだと考えることができる。だとす

るところで、凡庸ではあるが、ある疑問が浮かぶ。なぜ社会問題を、ジャーナリズムや研究でなく、パフォーマンスで取り扱うのか。その理由を網羅的に述べることは難しい。しかし、パフォーマンスを通して、社会問題を扱うことの意味を一つ挙げるとすれば、観客、つまりは情報の受け手の中に、ノンバーバルな要素によって喚起される情動を立ち上げる点にあるだろう。例えばトムキランとの会話には、その場に立ち会うからこそ喚起される情動がある。その会話は、内容の先読みや、捉えきれなかった文字の流れの中で補完する必要がある、非常に集中力を要する。「ALS患者の7割は気管支切開をせずに亡くなっていく」「家族に迷惑をかけたくないので死にたい人が多い」と言った情報は、それ自体でも観客の感情に強く働きかけてくる。しかしそれがパフォーマンスを通して示されることで、情報のみからは必ずしも引き出されない情動の働きが、観客の中で生じるのだ。